

〔平成23年度四街道市民大学講座（専門課程）の報告〕

平成23年度四街道市民大学講座（専門課程）の報告

企画担当 宇津木 言行

愛国学園大学では平成23年度市民大学講座を開講した。昨年度までは大学公開講座として本学の主催で行っていたものを発展させ、今年度より本学、四街道市、四街道市教育委員会の三者共催の市民大学講座として、地域の社会人教育により深く貢献することを目的として行うことになった。四街道市側の一般課程に対して、本学会場では専門課程の講座を平成23年9月17日より平成24年2月25日までの間に8回設けた。

本年度専門課程の総合テーマは「人間文化の中の宗教文化」とし、日本・東洋・西洋の諸地域・諸分野から、人間文化や社会を発展させ、彩りを与えてきたものとして重要な宗教文化を取り上げ、世界的視点から幅広く見直す講義を行った。本学専任教員の中から、このテーマに合わせて日ごろの研究成果を市民に還元する講義を担当する4人を選出した。講座内容は【日本古典文学の中の仏教文化】【日本の宗教儀礼と色彩】【西洋絵画で見るキリスト教世界】【東洋文化の中の仏教と女性】の4分野に分け、各担当の専門に宗教文化を関係させた題目の下にそれぞれ2回の講義を担当した。

以下に、担当者による各回の講義題目と内容の要旨を記す。

講座（1）

【日本古典文学の中の仏教文化】

宇津木 言行

第1回 平成23年9月17日（土）

『梁塵秘抄』の中の仏教

『梁塵秘抄』は流行歌謡「今様」を後白河法皇が集成した歌謡集で、明治末期に発見された巻二は仏教的・世俗的内容の歌謡から成る。現在では世俗的内容の今様にばかり関心を持たれているが、大正期には北原白秋など

仏教を歌う今様（法文歌）に興味を示した作家たちも多く、近代へ文化的広がりを持った。『梁塵秘抄』が成立した十二世紀仏教文化の中で同時代の文化的広がりをつ捉えると、仏会（ぶつえ）と称した寺院の儀礼の場が法文歌の生み出される場所として注目されている。仏会では仏画が飾られて経典の講釈（説経）が行われ、和讃などの歌謡が歌われもし、文学・美術・音楽・芸能など様々な芸術が相互に影響し合いながら生み出されたことが、法文歌の歌詞を画の中に隠している国宝『平家納経』を例に取るとよく分る。

『梁塵秘抄』今様の空間表現に着目して興

味深いことは、基層文化と仏教文化の対立・融合が見られることである。仏教的内容を歌いながら、仏教では不吉とされる左廻りの空間表現を取る歌謡があり、日本の基層文化とインド伝来の仏教文化では聖なる廻りの方向に対立があったことが分る。外来の異文化・宗教を受容するとき対立が起るのは当然だが、固有文化を守りながら異文化を吸収するためのひとつの方法を示している。

第2回 平成23年10月1日（土）

西行と仏教—数奇と仏道—

このところ西行ブームが顕著である。1989年の西行八百年遠忌の前後から著名な作家たちが西行を主人公とする小説を続々と発表し、その後ブームは一時沈潜したかに見えたが、2008年に出光美術館で開催された「西行の仮名」展の大成功を契機にまた盛り上がりを見せ、たとえば2010年に出た別冊太陽『西行』は初版を売り切って増刷がかかるほど好評を博した。西行の和歌と生き方への関心は根強い。

西行の文学と生においては数奇（風雅の道を好むこと）と仏道のバランスの取り方が重要と思われる。数奇と仏道が重なり合う場所として、彼が草庵を結んだ吉野が注目される。吉野は西行の生きた時代に花の名所となったが、吉野の奥から熊野にかけて続く大峰山で西行は修験者として二度の修行を行ったと伝えられる。「吉野の奥」の花を尋ねる一連の数奇の行動を詠む歌群中の一首に表れる「紅の雪」という語は、実は仙薬「紅雪」を詠み、吉野の奥の桜に仙境に咲く花の神秘を発見した歌であった。吉野の地は仙薬に用いられる水銀の鉱床があったことが知られ、

硫化水銀の赤い色を西行は吉野に咲く薄紅の桜に見出した。それは道教・神仙思想を受容した修験道の修験者として薬物の知識を携えていた西行ならではの発見であり、吉野の奥の桜を求める行為の中に、同時に仏道の奥義をも求めようとした西行という人間の思想の表れを見て取れる。

講座（2）

【日本の宗教儀礼と色彩】

早川 礎子

第3回 平成23年10月15日（土）

装束と幣帛における白の序列性・方位について—熱田神宮御衣祭の事例を通して

装束の色彩は、日本人独自の感性が最も表れる伝統色彩の一つといえる。そこには、平安朝で信仰された陰陽五行説を起源とする伝統色彩の象徴性が色濃く継承されている。白い装束は、大祭を除く中祭、小祭、及び日常の奉仕の場で着用され、斎服の袍・差袴の純白、浄衣の袍と差袴・狩衣の袍、白張の白色がある。斎服は、純白練絹で、他の装束の白と区別される。小祭の装束の袍は白色で、白衣を着用後、狩衣または浄衣を着用する。浄衣は白絹の狩衣であり、清浄を意味し、小祭・恒例式に着用する。白色無文で往昔より、清浄な衣服の一つで上皇をはじめ一般に至るまで神事や社参に用いた。

御衣祭は熱田神宮独自の祭礼の特殊神事である。御衣祭の装束は、白の装束で、斎服、狩衣、浄衣、白張である。毎年5月13日に行われる御衣祭は幣帛、和妙（絹）と荒妙（麻）を神に供える祭礼である。その装束の特徴と

しては神職の職階による階層性の区別はない。更に、白を表す色名は純白と白としていた。

しかし、装束の素材と装束の名称には序列があり、色名は白であっても、素材と装束の名称が異なることにより、序列が変化することが分かった。装束の名称と素材による序列の表示があると考えられる。

第4回 平成23年11月5日(土)

日本三大御田植祭にみる伝統色彩の象徴性—
香取神宮の緋色について

御田植祭は、農作物の恵みに感謝を捧げる祭礼であり、農作業であると同時に、豊作を祈る神事でもある。

香取神宮(千葉県香取市)の御田植祭は、伊雑宮(三重県志摩市)、住吉大社(大阪府大阪市)と共に日本三大御田植祭の一つとして知られる。香取神宮の御田植祭は、古来から受け継がれた方法で執り行われ、伝統色彩が色濃く継承される。

女子装束における緋色の象徴性として神職の耕田式では、大祭の装束の色彩は、黒・赤・青の位袍で、その色彩は階層性の表示をもつ。田植式では、神職は、階層性のない純白の練絹の斎服を着用する。少女・早少女・早乙女手代の装束の緋色は、耕田式・田植式共に、色彩の階層性の表示は見られない。これは、階層性を表示するための神職の装束の色彩象徴とは異なった象徴を持ってきたと考えられる。

緋色は、神職に見られたように身分の階層性を表示するものではなく、女性の既婚、あるいは未婚を表示し、象徴するものではなかったか。女性の生殖能力にあやかって、稲

の豊作を祈願する御田植祭の祭礼としての特徴から、緋色の装束を身につけることには、神職の階層性と異なった意味付けがされてきたと考えられる。

講座 (3)

【西洋絵画で見るキリスト教世界】

堀川 麗子

第5回 平成23年11月19日(土)

旧約聖書における「光」と「ことば」①

天地創造の物語

旧約聖書「創世記」において天地創造は、絶対的な創造主である神の発話によってまず光が造られ、その後6日間で全創造がなされたと語られている。西洋の画家たちは、聖書の記述を基に様々な媒体でこの情景の視覚化を試みてきたが、近代以降の独立した絵画では、動物あるいは人間の創造の場面が選ばれるのが大半だった。

そのような中、19世紀後半の英国人画家エドワード・バーン＝ジョーンズは、『天地創造の日々』(フォッグ美術館所蔵)において一連の創造物語を大型絵画の連作として表わすという特異な試みを行った。創造の過程を球体の中に描き込んだり、創造の日数に合わせて天使の数を増やしたりする手法は中世の先例に倣ったものであるが、天使のみならず創造世界を封じ込めた球体をも毎日に増やすことで画面上の時間と空間を重層化させているのはこの画家独自の発想である。さらに、球体の枠内で完結するはずの創造世界が境界を越えて時空が曖昧にされた外界の風景に影

響を与えているのも興味深い。枠で隔てられた異次元間の交流というモチーフは、幻視を題材にしたバーン＝ジョーンズの他の作品にも現れるが、これを伝統的な宗教画主題である天地創造に用いたのは、幻想の画家と称されるこの芸術家にふさわしい手法であったと言える。

レンブラントはユダヤ文化に共感を抱き、それを積極的に自らの作品に取り入れたことが知られ、この作品もその一例とみなすことができる。

講座（4）

【東洋文化の中の仏教と女性】

第6回 平成23年12月3日（土）

旧約聖書における「光」と「ことば」②

高橋 美和

ベルシャザルの饗宴

旧約聖書「ダニエル書」には、享乐的な饗宴に耽るバビロニアの王ベルシャザルの前に謎の手が出現し、解読不能な文字で王国の滅亡を予告したという逸話が記されている。

この主題を扱った作例の多くが異国風の宴の描写に焦点を当てているのに対し、レンブラントの《ベルシャザルの饗宴》（ロンドン、ナショナル・ギャラリー所蔵）では、突如現れた文字と驚き恐怖する人物たちのクローズアップという、バロック様式の特徴を見せる劇的な一瞬が描き出されている。とりわけ画家の興味が文字の表現にあったことは明白で、強烈な光を放つ文字は、周囲の暗闇との鮮やかな対比によって強調され、また、その存在感ある肉太の字体には文字が表現しうる力強い造形性への関心が表れている。さらに文字は、碑文で多用されるラテン語で表されるのが通例だが、レンブラントは旧約の世界に忠実にヘブライ語を用いた。文法や単語の正確さに加え、右から左という文字表記の方向の順守は彼がヘブライ語に関して深い知識をもっていたことを示し、また意図的に縦書きに記されているのも当時のユダヤ教の神学的議論に精通していたことを証明している。

第7回 平成24年1月21日（土）

東南アジア上座仏教圏における女性の位置づけ

スリランカ伝来の上座仏教は、現代のミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアに11～13世紀以来次第に受容されて現在に至り、これら4ヶ国の主要民族の大部分によって篤く信仰されている。近年のタイを除きこの地域で出家できるのは男性のみであり、出家＝男性、在家＝出家以外の男女という大枠は不変である。出家者は、家庭生活を離れて修行という解脱志向の実践を行うが、在家者は出家者に対する食事や金品の喜捨・布施を通して功德を積み、より良い現世と来世を願う功德志向の実践にもつばら勤しむ。上座仏教徒社会において両者は相互補完的な役割を果たす。つまり、生産活動を禁じられる出家者は在家者による喜捨により命を保ち、解脱し得ない在家者は喜捨によって生み出される功德でよりよい生を生きようとするのである。

在家の実践のうち、日常的で連続的なもの、特に食事の布施は主に女性によるものであり、また、最大の積徳は息子を出家させること（＝ザンガ（僧団）に息子を喜捨すること）である。女性＝母は、母性ゆえに子への

執着から離れがたく解脱志向の実践に適さないという言説のために解脱志向から遠ざけられているという面がある一方で、その母性ゆえに、出家者を生み出し寺院を支える「仏教の養育者」として、仏教徒社会においてゆるぎない地位が与えられている、と見ることもできる。

子仏教大学が設立された。カンボジアの女性修行者の中にも近年教学教師が誕生した。

このように今日の上座仏教界においては、宗教者として男性と同等の地位を求める動きと同時に、伝統的な修行者の地位に留まりつつ内実を充実させようとする動きが見られる。

第8回 平成24年2月25日（土）

仏教徒女性たちの挑戦——比丘尼サンガ復興運動と俗人修行者の活動

比丘尼（＝尼僧）サンガはスリランカにはかつて存在したが11世紀に消滅、その伝統が伝来したとされるミャンマーでも13世紀頃やはり消滅し、途絶えた。しかし、近年の世界的な男女平等主義の潮流は宗教の分野にも及び、国際的な女性仏教者の連帯を背景に、1990年代にはスリランカで、今世紀に入りタイにおいて、比丘尼得度が復活した。以来この2ヶ国では女性の出家者が多数誕生しているが、タイでは一般社会での認知度が未だ低く、女性の正式出家が社会に定着したとはいえない状況である。

一方、一般寺院の一隅もしくは独立修行所に居住する、剃髪し在家戒把持の俗人女性修行者の存在が東南アジアの上座仏教圏に共通して見られる。未婚者や寺院で老後を過ごしたい高齢者などが多いが、今日では比較的若く、多様な活動を行う女性がいる。ミャンマーの女性修行者は事実上の尼僧としての高い地位を保持し、教学の学習に熱心である。タイの女性修行者にも教学学習者や瞑想指導者が多いが、加えて寺院外部の社会問題等に取り組む奉仕団体の運営者も輩出している。1999年には彼女らの一部の尽力でタイ初の女